五　シンガポールにおける日本占領と私の体験

日本軍政への「協力」

シンガポール陥落後1ヵ月ほどしたころ、クンバンガンで家族とともに保養中の私のところへ、サマッド博士が前田氏を同道で訪ねてきた。サマッド博士は私を前田氏に紹介して、私が日本で資格を取った医師であり、日本語が非常に達者だと説明した。前田氏は私に協力を要請した。それを私は医学上のことだとばかり思っていたので、いやとはいえなかったが、後になって、その仕事は警察の彼の部署での通訳の仕事だと分かった。それはイギリス時代と同じサウス・ブリッジ街にある警察署の建物で、私はその一室に机を与えられた。そこには、もう1年も夫が帰ってこないという訴えや、どこに行ったかわからない息子を探してほしいなどという頼みが人びとから持ち込まれていた。こういうことでは私たちは大した役には立たなかった。私たちは、シンガポールに避難していてマラヤに帰りたいという人びとのために旅券を発行した。マラッカ、バトパハ、ムハール、ジョホール・バルなどから、そういう人びとは何百人となく押しかけてきていた。私たちはまた「良民証明書」というものも発行した。それはその家に住む者はよい性格の者であるという証明書で、それをドアに貼っておくのである。それをもらっておけば安心であった。ある日私は、テニス仲間でダブルスを組んだヤディ氏が、部屋の外に立っているのを見つけた。私が出ていってどうしたのかと尋ねると、彼は、持っている［英軍の］義勇兵の身分証明書を返したいという。私はすぐ前田氏に相談に行った。すると驚いたことに前田氏は、彼の中隊約2000名の者にも、こっそりその身分証明書を処分してしまうように伝えろ、と私にささやいたのである。ヤディ氏はその通りにした。そしてこの前田氏の耳打ちのおかげで、2000名の生命が救われたのであった。

ある朝、私は前田氏に呼ばれた。行くと、徳川義親閣下［軍政顧問］が私に会いたいといわれているとのことだった。私はラッフルズ広場の大地蔵の建物に出かけていった。それは感激の再会であった。徳川閣下は微笑を浮かべながら「皆さんは無事ですか」と聞かれた。私は頭を下げ「おかげさまで無事でおります」と答えた。閣下は「これからよろしく」といわれ、私は「こちらこそ」と答えた。閣下の傍らには秘書の市井氏がいた。徳川閣下は軍服に長い剣をつけてひどく小さく見えた。

3週間ほどたったとき、私は衛生課長の安藤博士によばれた。前田氏は私に、中国人の中で誰が反日的であり、誰がピストルを持っており、誰が暴力団か教えてほしいといったが、私はそれに答えられなかった。私はまったく知らなかった。それは私の関心外のことだった。私の診療時間は8時半から9時半までと、3時半から5時までで、1日の患者数は5、6

人であった。私が一般民衆の苦しみや悩みを少しでも助けようとして、専門外のことではあったが、満足と充足感を抱いて仕事をしたのは、2ヵ月くらいの間であった。マレー人の日本人に対する恐怖感は次第に薄らいでいった。しかし中国人はそうはいかなかった。

私たちの上司は新妻氏といい、おそろしい人で中国人から怖れられていた。東京外国語学校［現 大学］を出た市川氏が新妻氏の補佐をしていたが、市川氏は私が出席したことのある亜細亜青年連盟を組織した人であった。

衛生課長の安藤博士は、敵の資産と見られるバタリー通りの医療所から、薬品、医療器具、機会などをすべてよそへ移すようにと私に指示した。その場所の衛兵にあてた安藤氏の手紙をもって私は、何人かの作業員を連れて出かけて行った。品物はすべて倉庫にしまってあった。安藤博士はまた私に向かって、プラウ・シキジャンに行き、抑留されているイギリス人の衛生将校たちを連れてくるようにといった。2人の将校が私と一緒に来た。彼らは大変陽気で、恐怖の影などまったくなかった。安藤博士と彼らが何を話し合ったのか、私は知らない。おそらく次第に悪化しつつあった公衆衛生の問題であったろう。赤痢、チフス、マラリア、脚気、結核、栄養不良、貧血症などの病気が蔓延しつつあった。

ジャワから連れてこられた労務者たちの足の潰瘍の悪化ぶりは見るも悲惨だった。彼らはブサール通りやセラングン通りの道端にしゃがんで食べる物を通行人に乞うのだった。薬品は極端に不足していた。私の友達のハジ・イスマイル（55歳）が二週間も赤痢で苦しんでいたときすら、私はなす術がなかった。私はビマスの混合剤を与えたが、何の役にも立たなかった。私の友人が、ただ薬のないために死んでいく、ということは本当につらいことだった。私は死亡診断書には「赤痢」と記入したが、それは私の医者としてのキャリアの中で最初の苦しい思い出となった。彼は私の親しいテニス友達だった。

安藤博士の助手は寺口博士とメアリー・タンさんだった。私はチューン・グアン氏はどこにいるかと探したが、彼はどこにもみえなかった。そのうち安藤氏も去ってグビン氏が変わった。彼は私たちの2年先輩だった。

戦争中、昭南島と日本人に呼ばれたシンガポールは昭南特別市となり、島の35キロ南にあるバタム島も昭南特別市の管轄下におかれた。その市長は豊田閣下［元シンガポール総領事］で、東京外国語学校出の長井氏が市長秘書だった。私は長井氏を東京にいたときから知っていた。豊田閣下はしばらくしてやめ、大達〔茂雄〕閣下が新市長になった。

1943年の初めころ、軍政監部衛生部長の佐藤博士からは、イブラヒム医師、パグラー医師と私に対して、昭南医師会を組織するようにとの要請があった。私たちはその考えに大賛成で、まずアデルフィ・ホテルで発会式を開いた。佐藤博士は医師会の重要性について述べ、その任務は軍政当局と協力して、戦争のために悪化した一般民衆の健康状態の回復をはかることにあると述べた。出席者は約60名で、政府関係者も民間の開業医もいたが、皆一様に医師会の発足を支持した。昭南医師会の役員は次の通りであった。

会長　　パグラー博士
副会長　イブラヒム博士
事務局　佐藤博士の事務所
委員　　ヤップ・ヤウ・チン氏（開業医）
　　タン・ビン・シアング氏（開業医）
　　チア・ケン・ホエ氏（開業医）
　　筆者自身

私は食糧課の鳥永氏から手伝ってほしいとの依頼を受け、衛生課から食糧課に移った。米、砂糖、塩、小麦粉など日用必要食品はすべて配給制であり、それらを買う許可を求める人びとが押しよせていた。一方、食糧［管理］課は周辺のリアウ諸島の住民に対して、薪や炭、魚、野菜、果物、油をとるためのコプラなどを昭南島に持ってくるように要請した。そして彼らにそれらを昭南島に輸出することによって、石けん、ココナツ油、砂糖、塩などをある限度内ながら買い求める許可を与えた。米は厳重な統制下にあった。しかし一方、闇は盛んで、食糧や日用品のみならず、近隣の島々からのコプラやゴムまで闇市場で取引されていた。物価は数十倍に跳ね上がった。オランダ製クリム印粉ミルクは一缶1.5ドルから7ドルになった。一個5セントだったりんごは50ないし60セントになり、米は1カティあたり15セントだったものが1ドル以上になったが、それでもほとんど手に入らなかった。米がないとタピオカを食べた。衣類は庶民の手が届かない高嶺の花となった。古着をなんとかやりくりして作り直しては着た。私は鳥永氏が、王族の一人に小麦粉を2袋、特別に回してあげたことを非常に有難く思った。戦争がすんでからも、その殿下は何度も鳥永氏への感謝を私にことづけた。

米が統制なのでレストランは立ち行かなかった。私は何とかしてレストランの経営者を助けようとした。市でも一番大きいレストランの一つであるイスラミック・レストランがもうどうにもならなくなって、私に、何とか米を手に入れる許可を得てほしいと懇願してきた。私は鳥永氏にレストラン業者の窮状を説明したところ、許可が下りて、マラヤ諸州の首脳と軍司令官との会合のときは、このイスラミック・レストランが料理を受持った。

マラヤ諸州の元首と徳川義親侯

マラヤ諸州の首脳と軍司令官との会談は、徳川義親閣下のカトンにある公邸で行われることになった。しかしどんな食事を出すかが問題となった。いわゆるマレー料理というものはないし、中国料理を出すなど問題外だ。このイスラミック・レストランはインド風のイスラム式料理で有名なレストランだったので、私はここに頼むことを進言した。徳川閣下はそれに同意され、私がすべての手筈をととのえた。イスラミック・レストランは、私が衛生課から食糧課へ移ったとき、私の口ききで米の入手が出来たことを忘れていなかった。

徳川閣下はまた、大東亜戦争の方針についての講演をされること、そして私に通訳してほ

しいことを話された。聴衆はスルタンやラジャといった高官 たちであった。私は光栄に感じたが、私の日本語でそのように高度でデリケートな問題がうまく通訳できるのがどうか覚つかなかった。ほんのちょっとした翻訳の間違いが大きな誤解のもとになるかもしれないし、さらに私のマレー語は純粋なマレー語ではなかった。私のインドネシア風マレー語は聴衆に分かってもらえるだろうか、私は心配だった。

1942年も10月の頃だった。もとパハンのスルタンの邸宅であった徳川閣下の公邸に、この国で最も高貴な人々が集ってきたのは午前11時頃であった。

徳川閣下はスピーチを始める前に、その要点をもう一度繰り返して私に説明された。私は閣下の隣に座った。場内はしんと静まり緊張した雰囲気だった。

徳川閣下はまず、マレー半島各地の王族の人々に昭南島まで来られたことに対し感謝を述べた。戦争はまだ続いており、その中での旅行は大変であった。「日本は幾多の犠牲をはらって、いままで長きにわたりイギリスの植民地であったマラヤを解放しました。日本はマラヤに征服者として来たのではなく、友人として来たのであります。皆さまとここにこうしてお会い出来るのは夢のようであります……」徳川閣下が、スルタン、ラジャ等の地位は今のままで、何の変更も行われないと述べたとき、王族たちははじめて手を叩き微笑みを浮かべて、安堵の色を示した。私はほっとした。というのはこの非常に重要なポイントの通訳にあたって、私は日本語の表現をそっくりそのまま、その精神をまで聴衆に伝えることが出来たからである。

次に閣下は、マレー人の宗教、風俗、習慣にふれ、日本はそれを尊重し、何らの干渉も行わないと述べた。ふたたび拍手と微笑みがおこった。「各州の国内行政はいままで通りで、何らの干渉も受けないであろう。現状のままにおかれる」と閣下が述べると、さらに拍手が高まり、人々の口許も大きくほころびた。私は王族たちの何人かが嬉しそうに囁きあっているのを見た。はりつめた緊張がとけて人々は少しくつろぎ始めた。しかし私はまだ緊張しきって、精神を集中し、神経質に次は何を言われるかと待っていた。徳川閣下は言をついで、協力によって平和で幸福なマラヤを建設しうること、マラヤを地上の“楽園”にし、「マレー半島はマレー人のために！」と述べた。またさかんな拍手がおこり、人々は微笑みを浮かべ、笑い声さえおこった。私は場内の空気の変化を観察して嬉しかった。最後に徳川閣下は、首脳達に向かって、それぞれの国〔州〕に帰ったならば、今日の話の趣旨を国民によく伝えて十分に理解させてほしいと述べ、同時に日本語の学習を勧めてほしいと結んだ。閣下はスルタン達に心からの感謝を述べ、スルタン達も、満面に笑みを浮かべて拍手でそれに応えた。なんと朗らかで、楽しく打ち解けた雰囲気であったろう。徳川閣下も満足げににこにこしておられたが、私はまだ固くなっていた。私の通訳は大丈夫だったのだろうか、と心配だったのである。

ペラクのスルタンは、当日集まったスルタンを代表して徳川閣下に、マラヤの国々のすべての首脳達を招待されたことに対し礼を述べ、戦争中であるから不便なことはよく了解して

いると述べ、さらに徳川閣下が各元首の国の政体がいまのままで変更ないことを保証したことを感謝し、各州の教育、風俗、習慣に敬意をはらい、内政に干渉せずと言明されたことに対しても、心底からの謝意を表明した。「われわれは兄弟です。日本は兄でわれわれは弟たちです」とペラクのスルタンは微笑しながら言った。一同はそれを聞いて心からの拍手を送った。スルタン閣下は、全面的協力を約し、弟たちをよく指導してくれるようにと希望を述べた。徳川閣下の言われたことは国へ帰ってからすべての住民に周知徹底させるであろうし、日本語の学習も奨励するであろうとスルタンは言い、徳川閣下に向かってマラヤ諸州のすべての元首の感謝の念を皇軍の総司令部に伝えて欲しいという言葉であいさつを終えた。双方の側の拍手、微笑、満足の思いは、マラヤの歴史の新しい第1ページを飾るものとして、黄金のインクで書きとめられたのである。

聴衆はそこでくつろいで宴会にうつった。イスラミック・レストランのすばらしく美味なチキン・カレー、フライド・チキン、羊肉カレー、アチャル（漬け物）、海老の唐辛子煮など、高貴な来客一同は心から賞味した。

私の記憶する限りでは、この会議の出席者は、徳川候の秘書の石井氏、軍政監部の宣伝部長の小林大佐ならびにその部下たちであった。マラヤ諸州の元首たちは、ジョホールのスルタン、パハンのスルタン、トレンガヌのスルタン、ケランタンのスルタン、ラウヤ・バーリエ殿下、ケダのスルタン、ペラクのスルタン、セランゴールのスルタン等々であった。私は徳川閣下のあいさつを一節ごとに正確に通訳した。そしてこの歴史的な会合は午後2時に散会となった。マラヤ諸州の元首たちとじきじきにお目にかかれたのは、私にとって何と光栄至極のことであったろう。マラヤの諺では「頭の中が落ち着いていれば、精神も明晰になる」、「心が開いていれば、計算もとける」という。

会が終わった後でもなお私は、徳川閣下が話された大東亜戦争遂行方針の精神を字句通りに通訳できたかどうか不安であった。「マラヤの元首たちは、私のインドネシア訛りをすっかり理解してくださっただろうか。間違ったことを言ってしまいはしなかったか。」演説は会話口調ではなく、政治用語、外交用語も多かったし、二重の意味を持つ言葉もあり、言外にかくされた意味がきわめて微妙あるいは爆弾をかかえたようなものもあった。私は頭の中で逐一ふりかえってみた。

徳川閣下の執務室に入ると、閣下はにこにこといかにも嬉しそうに私を迎え入れてくださった。6年前に初めてお目にかかって以来、こんなに親しげな様子をみたのは初めてであった。徳川閣下は「良かった。助かった。本当に助かったな。そうしなければ大変です。本当だ。助かった。ありがとう」と言われ、私は「どういたしまして」と答えた。

私は軍政監部の顧問である徳川閣下が、私の通訳に心から満足されている様子を見て非常に嬉しかった。私自身は、私がマラヤのために完全に責務を果たす事ができるとは期待していなかった。マレー語の諺には「肩の荷は山の如く重し」というのがあるが、とにかく、恐れと疑念と不安の気持ちは数時間のうちに雲散霧消してしまったのだった［当時の状況につ

いては、明石陽至編『日本占領下の英領マラヤ・シンガポール』岩波書店、2001年を参照]。

マラヤ各地を視察

昭南医師会の役員の一人として私は、マラヤ全域を回り、衛生状態と薬品の供給状態を調べてくるようにと佐藤博士から命じられた。彼は私に、もしスルタンが何か贈物をしようとしても、決して受けとってはならないと注意した。私はこの機会を利用して、徳川閣下の演説に対するマラヤ諸州の元首たちの反応を探ろうと考えた。

最初に赴いたのは、安部博士の司会の下で会合が開かれていたクアラルンプールであった。私は博士に、今回の旅行の目的を話し、博士から天然痘、チフス、コレラ、ジフテリアのワクチンが不足だと告げられた。ピリティカやコデインも不足していた。一般の健康状態は悪かった。ビタミンも不足していたのだ。

私はこの他に、セランゴールのトゥンク・ケラナ殿下を訪れた。昼食に招待された席で閣下は私に、英軍降伏後に行方不明になった自分の甥を探してくれるようにと依頼されたので、私は昭南島に帰任後、その旨を徳川閣下に伝えた。トゥンク・ケラナ殿下は徳川閣下のスピーチに満足していた。

クアラルンプールを出発した私は、イポーで一夜を過ごした。会合はなかったので、私はイポーから約30キロほどのクアラ・カンサルにペラクのスルタンを訪れたいと思っていた。スルタン閣下は私を丁重にもてなしてくださり、私は王室に2泊もさせていただいた。私は王室の謁見室で、殿下の秘書カマルル・ザマン氏同席のもとに殿下にお目にかかった。

殿下は私に昭南島の現状を尋ねられた。私は昭南島は平和であり、秩序は保たれていると答えた。行政管理は順調にいっていた。ただ一つの問題は、食糧と衛生状況だと私はスルタンに告げ、私が出張を命じられたのはマラヤ各地をまわって、民衆の衛生状態と医薬品供給状況を調べるためだと述べた。「ペラクに関するかぎり衛生状態はおおむねよい」と殿下は言われた。謁見が30分ほどで終わると、カマルル・ザマン氏は、王室から約100メートルほどはなれた王家の廟に案内してくださった。私はそこで頭を垂れて祈った。翌朝、殿下は私をテニスに誘われた。殿下はそう上手ではなかった。ボールを追ってかけまわるのが好きでなかった。そこで私が殿下めがけて直球を打つと、巧みに打ち返されてご機嫌であった。プレーヤーは私たち二人だけだったから、それは試合とはいえなかったが、1時間ほどボール打ちを楽しみ、次の朝も同じようにした。こうして王室に2晩も泊るという光栄に浴したのち、私は殿下とカマルル・ザマン氏に別れを告げた。この王室で示されたご親切なおもてなしはとうてい忘れられない。

この3日間にわたる滞在を通して私は、スルタンが、徳川閣下の述べられた日本の意向に関してなんらの疑念も抱いておられないという印象を受けた。

ケダのスルタンからも私は同じ印象を受けた。ここでも私はアロール・スターの王室へ拝謁を許されたのであった。私は旅行の目的を述べ、殿下は昭南島の状況について尋ねられる

とともに徳川閣下はお元気かと聞かれた。私は昭南島は平和であり徳川閣下もお元気であると答えた。私はここで病院訪問を許されたが、病院のモハマッド・ディン博士は、状況はまずまずだが薬品不足で困っていると答えた。

ケダの次に訪れたのはペルリスであった。まずペルリスのラジャをお訪ねしたが、ラジャはもう1ヵ月も病床に臥しておられた。そこで私は侍医のシナサムビイ博士にあって殿下の容態をきいた。私の見立てでは殿下の病気は心臓水腫か腎炎だと思った。しかし私たちはもう70歳でご病気の殿下の前ではそういう話は一切しなかった。シナサムビイ博士は私に、何か手が打てたら頼むといわれたので、私は昭南島に帰着次第できるだけのことをしようと約束した。

カンガルの病院は古い木造のバラックでそこにはさまざまな病気の患者が60人ばかり、ごちゃまぜに収容されていた。多くは結核患者だった。薬も欠乏していたし、患者の処置も食物も適当でなかった。私はここに2日間いてこの地をあとにした。

私はヤン・ディペルトゥアン・ブサール殿下に敬意を表するためにスンビランに足をとめた。ここでも私は殿下に旅行の目的を話した。ここでも衛生状態はそう悪くはないが薬品不足を訴えられた。殿下は赤十字へとご親切にも寄付を下さったが、私は殿下に、出発前に佐藤博士に言われているので、そのご寄付をお受けできないのが残念だとお答えせざるをえなかった。殿下はスリ・メナンティの王室から30キロの道を、わざわざおいで下さったのだった。会話は形式ばったところがなく、くつろいで行われた。ここでも私は徳川閣下の演説が暗黙のうちに感謝をもって受け止められているのを感じた。

私は昭南島に帰りつくと、その足で軍政監部に佐藤博士を訪ね視察旅行の報告をした。ペルリスのラジャの病気のこと、一般の保健状況はそれほどひどくないがワクチンや鎮痛剤、ビタミン剤などが欠乏していることなどを告げた。この8日間の視察旅行は私の1人旅で、しかも私は自分で車を運転して行ったのだった。あらかじめ連絡しておくこともせず、いきなり行ってドアをノックするといったやり方だった。

私にとってこれは初めてのマラヤ旅行でもあり、ゴムの木や稲田も珍しかった。それよりも私はマラヤ各地の元首たちと親しくなり、また同じ医療分野に働く医師たちと親しくなれたことが嬉しかった。私はどこでも暖かい歓迎を受けた。この兄弟の国の旅行は今に至るまで私の心の中で楽しい思い出として刻まれている。

しかし私ががっかりしたことは、ペルリスの病める老ラジャについて衛生部からも衛生課からも何も言ってこなかったことである。私は慈恵会医科大学の二年先輩であったクビノ医師を通じて、何とか援助してほしいと申し入れをしておいたのだった。

様々な活動

ある日、私は憲兵隊から週に2度、10時から10時半まで日本語を教えてほしいと頼まれた。憲兵隊は、徳川閣下の事務所や財務省と同じビルの中に本部があり、昭南特別市庁舎か

らは1キロほどのところにあった。私はその依頼に応じた。教科書は憲兵隊の作ったものだったが、馬鹿とか嘘つきとか、打たれるとか、本当のことを言えとか、捕えるとかいうような言葉がたくさん入っているものだった。教科書の内容の理解はやさしかったが、発音、ことにRの発音は難しかった。しかしとにかく2ヵ月間にかなりの進歩がみられた。受講者は約20人だった。

教育課長の太宰氏は私に、マレー人教師たちに日本語を教えるよう要請した。授業は週2回、午後4時から5時半までとなった。教科書はなかったので、私はまず発音から始めて独自の方法を考えねばならなかった。こちらではツの発音が難しかった。私はかつて自分が藤原先生に習ったときにしたように、生徒に家で練習するように命じた。そして自分の体験を思い出しながら、挨拶の言葉、言葉の配列、は、が、を、に、で、などの使い方へと進んでいった。毎日の会話練習、語彙の習得、作文、練習問題などは欠くことのできない勉強だった。マレー人の教師たちはわりに進歩が早く、どんどん日本語に親しんでいった。生徒は女性10人を含め約60人だった。教室はビクトリア通りのコタ・ラジャ・マレー学校の食堂で、ノース・ブリッジ街の私の診療所からは1キロ半くらいの所であった。

1945年のはじめ頃、私は昭南特別市の医務局から私の住む地域の警防団長に任命された。そして私の生徒たちは婦人教師を除いてすべて月初時に救護班員になることになった。包帯の仕方、骨折の際の副木の当て方、止血法、担架に乗せて運ぶ方法などを教え、週に1回、ラジャ・カレイの校庭で応急処置の練習を行ったが、先生たちは熱心にその訓練にのぞんだ。

昭南特別市ではまた厚生課の篠崎護課長の指導の下に、各民族による厚生協会が設立された［篠崎護『シンガポール占領秘録』原書房、1976年参照］。すなわち中国人、白人との混血児、アラブ人、インド人、マレー人などがそれぞれの厚生協会を設けたのである。これは異なった民族、異なった宗教を信じ、異なった文化をもつ諸集団のそれぞれに統一をもたらし、ひいては昭南特別市において、民衆の苦情をやわらげ、水道、電気、ガスなどの重要事業、それにある程度まで軍の施設に労働者をまわして仕事を円滑にするために考えられたものであった。

マレー人厚生協会の特別任務は、20歳から24歳までの青年を兵補訓練のために集める一方、農民たちにカリムン島で食糧増産を行わせることであった。これまでのところ、マレー人の間では住居とか食物とか衣類などの要望はあまりなかった。というのは、中国人と比べて、マレー人の戦争による被害者はそれほど多くなかったからである。

マレー青年たちの間での兵補に対する対応は驚くほど良かった。私はアッパー・セラングン街にある彼らの宿舎を訪ねたが、ここは以前は学校だった建物で、そこで青年の1人に感想をきくと「訓練は非常にきついし、規律もきびしい。しかし団長は訓練のとき以外は私を同等の者として扱ってくれる」といった。また、私の知り合いのシ・ブユンという20歳のミナンカバウ出身の兵補も「僕たちに吹き込まれた日本精神のおかげで、僕たちが生得の権

利として持っている人権と人としての価値というのが分かりました」という答えで私を驚かせた。「いまこそわれわれは、われわれの立場がどんなもので、われわれはどういう者かを悟りました」とも彼は言い、兵補のうち200名ほどがインドネシア青年で、彼らの両親はインドネシアの各地から来ていた。私は彼らに、規則や決まりをよく守って任務を忠実に果たすよう励ました。彼らはまったく満足していた。イブラヒム・ヤコブ氏は義勇軍の大佐で、パハンの出身であった。シ・ブユンはひまのときにはよく私の診療所を訪れたが、陽気な青年でいつもにこにこと笑顔を絶やさなかった。

昭南特別市は市の南方28キロほどの所にあるカリムン島の500エーカーの土地をマレー人に割当てた。またネグリ・スンビランのバハウの、ほぼ同じ規模の土地を混血児に、ジョホールのエンダウの土地を中国人にそれぞれ割当てた。

私は自発的にその土地を訪れて、仕事がどのくらいはかどっているか、また80名ほどの入植者の生活はどんな状態かを見に行った。そこはゴムの木のジャングルを切り拓いた所だった。入植者の1人は「この土地は乾燥しすぎていてほかの植物は育たない。灌漑を施さない限り、この土地を開墾するのは無理だ」と言い、暗い見通しを立てていた。健康状態を聞くと、皮膚病が蔓延していること、そして薬が足りないことを聞かされた。マラリアにかかった者も何人かいた。米、砂糖、塩、ココナツなどはすべて配給で、ようやく足りるといった程度であった。こういう状況のもとでは開墾もなかなか進むまいと思われた。

私は白人との混血者が入植したバハウにも行ってみた。ここでの状態もカリムン島と似たり寄ったりで、バン・クイレンバーグ氏はミドル・ロードの開業医であったのに、自ら進んでそれを捨ててここへ移り、80人ほどの入植者の世話をしていた。ここはまだゴムのジャングルを切り拓いている最中であった。ここでもゴムの木のジャングルを開墾して他の作物を育てるのは難しいという話を聞かされ、戦況の変化とともに結局この2ヵ所の開墾は失敗に終った。

マレー人厚生協会の会長はトゥンク・フセイン氏で、彼はリアウの王族の出であった。オナン・ハジ・シラジ氏はその秘書であった。混血者厚生協会会長はパグラー氏、インド人厚生協会会長は法律家のゴホー氏、中国人厚生協会会長はS. Q. ウォン氏、アラブ人厚生協会会長はモハマッド・アルカフ氏で、これらはそれぞれ大達市長閣下の任命によるものだった。

マレー人厚生協会で私は一委員にすぎなかったが、日本へ行った経験を持つのは私1人だけだったので、どうにかして日本の役人たちとマレー人をもっと接触させようと試み、さまざまな社交的な会合や文化的な催しをするように努めた。

これには軍政監部宣伝班長の島貫氏も協力してくれ、マレー人は時折、ビクトリア社会会館で文化的な催しを開いた。そういうときには、ミナンカバウのタリ・ピリン（皿踊り）シラット（護身術）、バリの宗教的な踊りであるデビ、ジャワの宮廷ダンスであるタリ・スリンピ、マレー人の有名の歌手ミス・サロマの歌やアクロバット・ダンスなどが演じられた。

この最初のショーは徳川義親閣下、閣下の秘書石川氏、島貫氏およびその部下たちも大勢出席し盛会であった。出席者はマハチア・エフェンディ氏とスハラ夫人の率いるボレロとリラ演劇グループであったが、これは1942年2月の日本の勝利以後最初のマレー人による文化活動で、この文化祭は夕方の7時半から10時まで行われた。

日本軍政当局者とのより緊密な接触をはかるための集会も行われた。大東亜戦争は日本だけの戦争ではなく東南アジア全体の戦争であり、大東亜共栄圏建設の戦争であり、この戦争はどうしても勝たねばならないということを一般民衆に分からせねばならなかった。

ゲイラン映画劇場は満員の盛況だった。朝9時からなのに、である。演説者のウマル・グスマン氏やズビール・サラム氏は声を大にして、この重大な時機にあたってマレー人は1人残らず、汗によって、または筋肉の痛み、胃の痛み、身体の疲労などを通して、大東亜戦争が輝かしい勝利を得るために、なんらかの貢献をせねばならないと説いた。「腕をこまねいて、あたりを見回しながら座っているのは罪をおかすものである。われわれは全面的に日本軍と協力せねばならない」と人々は口ぐちに説いた。

ゲイラン・セライのスター野外劇場での会はマレー系婦人たちのための集会であった。彼女たちも台所から出てきて、袖をたくしあげ腕を組んで勇敢に前進し、銃後の守りを固めなければならない。犠牲を払うのは男ばかりでない。それは女にも要求されていたことであった。マレー女性たちも、大東亜戦争の最終的勝利のために貢献すべきである。27歳のロハナ・ジャミル夫人が熱弁をふるって最高潮に達したとき、ちょっとした事件が起こった。彼女は次のように言ったのである。「いまはダイヤモンドの耳飾りとか、プラチナのネックレスとか、金の指輪とか、贅沢な衣装や金糸の縫とりがあるサロンなどを見せびらかすべきときではないのです。今は戦いのときです。」他の女性たちも続いた。23歳のムライニは弁の立つ、はっきりした口調の女性、マス・ネンは21歳で甲高い鋭い口調で激しく喋り、微妙な点を説明しようとするときはジェスチャーを交え、表情までこわばらせて話した。会場は人であふれんばかり、このような女性ばかりの集会が開かれたのはマレーの歴史始まって以来のことだった。これまで女性はこのような集会には顔を出さないことになっていたのだ。

会が終わってから私はロハナ・ジャミル夫人をよんで叱った。公衆の前であんなことをいうべきではないとたしなめたのだ。すると彼女は、「私はそんなふうな女は大嫌いです」と言った。私は、彼女が誰のことをいっているのかは分かっている、といった。彼女はさらに怒った調子で「どうして我慢していられるでしょう。いまは見せびらかしたりしているときではないのです」と言い放った。私はようやく彼女をなだめた。

ロハナ・ジャミル夫人は後に国会議員になった。彼女がシンガポールにきたのは1981年で、私を訪ねて来てくれ、2人で戦時中の婦人たちの活動についての思い出を語り合った。その翌年1982年の6月から7月にかけ彼女はメッカへの巡礼に出かけ、その旅の途中で客死した。私はそれを聞いて心から哀悼の祈りを捧げた。彼女はマレーの婦人たちの社会的な

覚醒に大きな貢献をした婦人であり、大東亜戦争中は勇ましい戦士であった。

徳川閣下は私に、もっと木綿をつくり衣料に役立てるようにしては、と提案された。私はリアウのスルタンの親戚で、ゲイラン・セライの村長に任命されたトゥンク・プトラ氏に相談した。ゲイラン・セライはマレー人がきわめて多い地域で、彼はそこにある彼の小さな木造の家に徳川閣下をお招きして、それについて話し合った。原則的には賛成だが、技術的には問題があった。サロンは布地を多く必要とし、働き着としては不便である。これを変えれば布地は節約できる。マレー人女性も工場やその他の場所で働くようにしなければならない。そうなるとその作業に合った服装に替えなければならない。トゥンク・プトラはこの問題はしばらく考えてみようと言った。徳川閣下と秘書の石井氏は、さまざまなマレーの菓子をおいしそうに食べられた。トゥンク・プトラ夫人はトゥンク・ファチアといい、トレンガヌ王家の一族だった。彼女も徳川閣下ならびに石井氏に挨拶した。徳川閣下は招待のお礼にと、トゥンク・プトラ氏の家の前に、高さ70センチほどの綿の木を自ら鍬をとって植えられた。トゥンク・プトラ氏の親戚の者たちと私はそれを見守ったが、それは非常に印象的な儀式であった。このアイディアは結局実行されず、マレーの女たちは相変わらずサロンを着て働いていたが、私はマレーの王家の血筋であるトゥンク・プトラ氏の小さな木造の家がこうした光栄に浴したことを心から嬉しく思った。

誤解―双方とも正しく、双方とも間違っていた

1943年の半ば頃、私は大達市長によって食事会の一員に任命された。私はそれまでも、私の出来る範囲のことをして昭南特別市のために尽くし、同時に徳川閣下のためにもいくぶんお役に立ち、軍政監部の顧問をもつとめ、軍政監部の宣伝班や衛生班のためにも働いてきた。私が東京であった佐立氏は軍政監部付きであった。佐立氏はそれ以前にもバタビアで私のビザの裏書きをしてくれた人であった。そして佐立氏は朝日新聞が私にインタビューするようとりはからってくれ、その記事には私の経歴と、私が日本の医科大学を卒業した最初のインドネシア人医師であり、いまは軍政当局に全面的に協力していると書いてあった。

ある日のこと、私は急に昭南特別市の会議場で開かれるある会合に出席するようにと篠崎護氏に言われた。行ってみると、そこの椅子の並べ方は、反対側に一つ特別の席があるようであった。私はそこへ1人腰を下ろした。反対側にはマレー人厚生協会の委員たちが6人ばかり座ったが、その中にはカリム氏、イシャク氏、トゥンク・ハッサン氏、ラムリ氏などがいた。そして真中の席には篠崎氏、議長のトゥンク・ハセン氏、それに書記のオナン・ラジ・シラト氏が座った。驚いたことに、私は「裁判」にかけられるのだった。いったいどうしたのだろう。いったい私はどんな悪いことをしたのだろう。私は英帝国の牢獄の独房第6号を思い出した。また何かのことで犯人にされたのであろうか。

篠崎氏は口を開いて、私がマレー人社会に分裂を生じさせていること、この分裂はマレー人社会を弱体化することに通じ、なすべき仕事を妨害しており困ったことである、と述べ

た。「いまはまだ戦争中である」と彼は語気を強め、マレー人社会の一致団結のために協力してほしいと要請した。

彼の口調は怒気にみちていた。私は彼が感情のはけ口を求めて喋るままにさせじっと黙っていた。私は実際のところ当惑していた。いったい私のしたどんなことがマレー人社会を分裂させたというのだろう。

篠崎氏が話し終わると、私は静かに立ち上がっていった。「マレー人は私にとって同じ種子から出た兄弟です。私と友人たちは、どんな指令がおりても一緒に心をつくして協力して働いています。それはマレー人全体のためであり、スマトラのためではありません。私たちはマレー人の活動を邪魔したことなど一度もありません。私や友達は、わが身を犠牲にしてマレー人社会のために働いています。仲間割れがあるなどとは思えません。」

私のマレー語は区切りごとにオナン・ハジ・シラジ氏によって英語に通訳された。篠崎氏は私に英語で話した。判決もなければ解決もなかった。そこでこの会合は散会となった。

私は自分をインドネシア人として認めて、マレー人と一体化しなかったというのだろうか。「インドネシア」という言葉は禁句なのだろうか。私は公衆の前でインドネシアの独立について語ったことがあったろうか。私は戦争前からインドネシア人としてみんなに知れわたっている。篠崎氏は誰かにそそのかされたにちがいない、と私は思った。

「インドネシア」という言葉への反発

それから1ヵ月ほどして私は、徳川閣下の公邸から2キロほど隔てたカトンの日本料理店での昼食会に招かれた。これはマレー人厚生協会のことについての話し合いに違いない、と思いながら私は出掛けて行った。

私がそのレストランについたのは12時半ころだった。驚いたことに、そこには、1934年の夏ごろ東京の有楽町で行われた亜細亜協会の昼食会で会った一人の紳士が待っていたではないか。私は彼の名前を覚えていなかった。彼は小林と名乗り、私のことはまったく記憶にない様子だった。しかし私ははっきり覚えていた。彼の丸い顔、小太りの体躯、それはまぎれもなく私に昼食会でのスピーチを頼んだ亜細亜協会の幹部だった。そこには緊張感があった。2人とも顔を合わせたまま黙っていた。しかし彼はすぐ口をきって、自分は軍司令官の命令でやってきたのだが、マレー人社会は私のために分裂を生じていると聞き、まことに残念である。マレー人社会はしっかりと団結していなければ困る。「戦争中には特にすべての業務が平穏に行われることがきわめて肝要である」と言った。

私は答えて分裂などまったくないこと、昭南島には、100年も前にリアウ島から来た者たちの子孫がいるが、その人々も全面的に協力しているし、私もその人たちを拒否するわけにはいかない。「昭南島は昔はリアウに属していたのです」と私は説明した。彼は黙って聞いていたのち、外交辞令的な言葉を繰り返した。「それはそうです。が、いま、われわれはマレー人社会からの全面的な協力を求めているのです。もし分裂しているとなると仕事はうま

くいかないし、そうなるとマレー人たちのためにも不都合でしょう。いまは戦争中なのです。」

私は再び小林氏にいった。「分裂などということはまったくありません。私も、私の同僚たちも、マレー人と全面的に協力しています。私がマレー人の計画や活動を妨げたなどということは決してありません。私も委員の一人ですからね。マレー人のうちインドネシアの血を受けたものは四分の三もいます。彼らは軍政府によく協力しています。それは否定できない事実です。」

すると小林氏は私の言葉を遮っていった。「いずれ戦争が終わってから話を続けましょう。」しかし最後の言葉は「気を付けてほしい」という強い警告であった。私はその意味とその警告の結果がよく理解できた。だが私は脅迫でたじろぐような人間ではない。畳に座って日本茶をすすりながらの、顔をつきあわせてのこの会談は約20分で終わった。小林氏は私のことなどまるで記憶にないかのような知らん顔で押し通した。私も同様であった。解決はなかった。昼食もなかった。私のほかには誰も来ていなかった。昭南特別市で何か解決できない問題があると、それは軍司令部に送付されたが、そこでも解決はみられなかった。双方とも正しく、双方とも間違っていた。マレーの諺にしたがえば、「ダンスが出来ないからといって、床板が曲がっているなどと床板のせいにするな」である。

なぜそんなことで責められたのか。その理由と思われるものを列記してみよう。

私を含めて20人ばかりの「アンカタン1942」(1942年世代)と呼ばれるグループは、昭南特別市ではなく軍政監部のもとで大東亜戦争の理念の広報活動に従事していた。私たちは軍政監部の宣伝班と緊密な連絡を保っていた。この仲間はほとんどがスマトラ出身で、宣伝活動にも長じていた。

マレーの文化活動は豊かな文化をもつインドネシアを源泉とするものが多かった。これらの文化、演芸公演は宣伝のためばかりではなく、社交のためにも、また単なる娯楽としても行われたが、一般大衆に対して、マレーよりもインドネシアをずっと強く印象づけた。マレー人の四分の三ほどはもともとインドネシアから来ている。彼らは何世紀にもわたって英国統治の下で無視されていた。インドネシア人厚生協会は存在しなかった。この方針は理解可能なものであった。マレー人社会の中にあってインドネシア人社会は、軍政監部と昭南特別市と完全に協力してやっていた。

昭南特別市と第二十五軍軍司令官が非難したところの分裂は、協力範囲についての計算ちがいから発していた。分裂など実際は存在しなかった。兄弟間の協力はまったく見事なものであった。

「アンカタン1942」は生得の権利として自らをインドネシア人であると標榜していた。軍政監部は「アンカタン1942」がインドネシアという言葉を使うのが気に入らなかった。「アンカタン1942」はいつでも機会があるごとに、話すのにも、行列などでも、文化的催しでも、常にインドネシア人を名乗っていた。その「インドネシア」という言葉は、独立国家と

してのそれと解釈された。この言葉はマレー人に対して、民族的な強いひびきを与えるかもしれない。彼らは政治的な影響をこうむったかもしれない。だが実のところ、日本占領下の3年半のあいだに、このインドネシアという言葉が政治的な意味合いで使われたことは一度もなかったのである。私たちは私的な、会話的な意味で使ったのであって、主観的な効果が広がったのは私たちの意図したことではなかった。

昭南特別市と軍司令官が私をマレー社会を分裂させた張本人と決めつけたのは、政治的な立場からのものであることは明らかである。いずれにせよ、主観的に見れば「アンカタン1942」の勝利であった。1945年8月、日本軍の降伏と同時に紅白のインドネシア民族旗が掲揚された。この「インドネシア」というデリケートな含意を持った言葉は、1933年から1954年に至る22年間の私の外国生活（東京―シンガポール―昭南島―シンガポール）を通じての悲劇的な歴史の一こまとなっている。

昭南特別市と軍政監部での私の奉仕活動

宗教

最初に私の力を借りにきたのは、かつて私が診療所を開こうとして部屋を求めたあの友人であった。私はちょうどノース・ブリッジ街の診療所を出て警察へ向かうところで朝9時半だった。私は彼をみて非常にびっくりした。何という態度の変わりようだろう。物腰も低く、顔には微笑を浮かべ、お辞儀をしながら入ってきた。私はすぐあのロロン・アンク・アマンの苦い思いを頭に浮べた。しかし私は憎悪の気持を押し殺した。「腹に虎がいてもそれを顔にあらわすな」とは私が同胞からよく聞かされる忠告である。彼は私に、私や家族は元気かとか、診療所の方はどうかとか尋ねた。私はありがとうと言った。彼が訪ねてきたのは、イスラーム教導師（イマム）の地位や、イスラーム学校教師の地位、モスク、イスラーム学校、金曜日の祈祷や、宗教儀式にも何らかの制限が加えられるのかどうか、などを聞きに来たのであった。私は、自分の知る限り宗教にはなんらの制限も加えられていないと答え、詳しいことを聞きたければ軍政監部の宗務局へ行くようにと教えた（実際のところ、彼は私にそこへ連れて行ってもらいたくて来たのだった。）さらに彼はメッカへの巡礼のことについても聞いたので、私は、戦時中は船の切符が手に入るかどうか分からないし、第一とても危険な旅だと答えた。その説明は彼を納得させた。そして彼は私に脚気だったと言って「わかもと」の錠剤を求めた。私は医者としてそれを断る勇気はなく、その後何ヵ月も、もう入手できなくなるまで彼に供給し続けた。彼はしばらく私に、軍政監部宗務局の人々とイスラームの指導者たちとの社交的な会合のあっせんを依頼した。私は喜んでその要請に応じた。というのは宗務局長の若林氏に私は、1936年に東京の日比谷公会堂でイスラームの会議が開かれたとき会って、よく知っていたからである。若林氏はイスラーム教徒たちの持つ疑念を解くために活発に動いてくれた。

ビンタン島の緊張状態

1942年の半ば頃であった。タンジュン・ピナンの副知事のマアヒット氏と裁判長エンク・サミン氏が朝10時ころ私の診療所を訪ねてきた。驚いた私がわけをきくと、タンジュン・ピナンの華僑と現地住民たちの間に感情のもつれから対立が起こっているというという話だった。華僑たちはシンガポールから武器をもって逃走した中国人ゲリラにそそのかされているということだった。彼らはリアウ諸島と石油を産出するドマイ地方とを合わせて中国領だと宣言しているということであった。中国国旗が掲げられ、その地域のオランダ当局者から中国人社会のまとめ役に任じられているカピンタン［甲必丹、首長］は、オランダが降伏したのちタンジュン・ピナンを去ったオランダ人の副知事に代わって自分が副知事であると名乗っているということであった。現地の住民たちはすごく憤慨しているということで、もしそういう不穏状態が続けば、大変な事態になるだろうと2人は真剣な面持ちで伝えた。それで2人は私に、すぐ何とか手を打つようはからって欲しいと言うのであった。

私たち3人はすぐに昭南特別市庁舎に出かけて行った。私は厚生局課の責任者である篠崎氏に2人の報告を伝えた。篠崎氏はすぐ私を市長の豊田閣下のもとへ連れていった。ドアをノックすると開けてくれたのは長井氏で、長井氏は私を見ると嬉しそうに笑って握手の手を差し伸べてくれた。

長井氏は、おどろいている2人の連れに、流暢なマレー語で、彼はかつて私の生徒だったと語った。私は手短かにビンタン島の状況を告げると、私たちはすぐ豊田閣下に引き合わされた。豊田閣下は私のことを良く覚えておられた。私たちは腰をかけ、マアヒット氏が話すのを私が通訳した。豊田閣下は細かい点は抜きにして重要な事柄について3つの質問をした。それは「治安状態はどうか」、「食糧供給事態はどうか」、「税の納入状況はどうか」というのであった。第1の質問に対する答えは中国人住民と現地住民たちの間に摩擦があるというもので、第2には十分ゆきわたっている。第3には、「健全で安定している」というものであった。豊田閣下は直ちに1枚の紙を取りあげ、それにマアヒット氏はビンタン島長である、エンク・サミン氏（自分の昔からの友人である）を裁判長に任命するとの証明を書いた。この辞令の内容を長井氏がマレー語で説明した。私たちは心から豊田閣下にお礼を申し述べた。私の2人の友人にとっては何と大きな安堵であったことだろう。長井氏は「また何か問題があったら、いつでも知らせて下さい」といって私たちを送り出した。私たちは皆にこにこしながら握手を交わした。中国人による主権侵害はこうして半時間もかからずに解決された。

それから何ヵ月かして、ビンタン島の地方官エンク・モハマッド・アパン氏が私を訪れてきた。すべてがうまく行っており、人々も皆満足しているということであった。「流血にいたらなかったのはアッラーのおかげだ」と私たちは喜び合った。マレーの諺には、「手を与えると、ももをくれという」というのがある。この事件はこうして落着したが、一つの歴史の一こまであった。

ミナンカバウおける教育

1942年の半ばころだったろうか、私のノース・ブリッジ街の診療所に突然、小学校時代の恩師エンク・アブドゥラ先生が、同僚のエンク・ダトック・マジョ・ウラン先生と一緒に訪ねてみえた。朝の10時頃だった。何か重大事件が起こったにちがいない、と私は思った。当時スマトラとマラヤはともに第二十五軍の軍政下にあった。エンク・アブドゥラ先生の語るところによると、オランダの降伏以後も、ミナンカバウではそれまで通りのオランダ式教育制度が引き続き行われていた。しかし事態が変化したのであるから植民地時代の教育制度も変えたいが、どういうふうにしたらいいか知りたいということであった。それでその説明を聞きに2人は昭南島にやってきたのであった。「まったくどうしていいのか分からない」とエンク・アブドゥラ先生は困っていた。私も答える術を知らず、私たちはすぐ連れだって徳川閣下のもとを訪問した。私は2人の旧師を徳川閣下に紹介した。閣下は答えて、いまのところ教育制度は当分そのままにしておく、ただ日本語だけは教師も生徒も一生懸命に習ってほしいと言われた。それはまったく明白な回答であった。私たちは徳川閣下にお礼を述べて退出した。私にとって何と嬉しいことだったろう。私はエンク・アブドゥラ先生には、1924年以来お会いしてなかった。ほぼ20年ぶりの再会で、しかも私はミナンカバウのために役に立つことが出来たのである。

財産保護について

1942年の9月ころだったと思う。私の診療所にスルタンの皇太子が訪ねてみえた。にこやかに握手をした殿下は古びた診療所の椅子に腰をおろした。堅苦しい儀礼は抜きだった。私がスルタンの健康をたずね、その他一般の情勢について質問すると、「別に変わりはないが、私はあなたに日本兵の振る舞いについて話したかった。彼らは泥靴のままで玉座に足を組んで座り込み玉座を侮辱した。王宮そのものを泥だらけにされた」とこぼされ、「自分の自動車もどうされるか分からない。いつ持っていかれてしまうか、あなたに何とかしてもらいたいのだが」と言われた。私は「私に出来るだけのことをいたします」と答え、早速このことを徳川閣下に伝えた。閣下はそれを聞いて非常に驚かれた。すぐ手を打たれたらしい。1ヵ月後に昭南島で殿下に会った時、皇太子は私のしたことに対して感謝されるとともに、命令の敏速さに満足を表された。

医師として

私は手元にあったアドレナリン2瓶のうち1瓶を旧友A. K. ガニ氏に進呈上した。氏はそれを非常に必要としていたのだった。ガニ氏は南スマトラのパレンバンに診療所を開いていたが、薬品類を手にいれるためにわざわざ昭南島に来たのだった。彼と私はパダンの中学での学友だったが、その親しい友にあまりたくさん薬をわけられないのが心から残念だった。昭南島でも薬品入手は極めて困難になっていた。

私は衛生課に、アラサズフの野外診療所―それは慈善施設だった―に薬を配給してくれるように要請した。解熱剤のアンチピリン、ビタミン類、下痢止めなどすべてが不足してい

た。それで私の依頼にこたえていくらかの薬がもらえたときは本当にうれしかった。

また、私は徳川閣下に、王家の一族の人で英国軍に参加した人が行方不明なことを伝えて閣下の努力をお願いした。開戦直後の戦闘が終わって何ヵ月もなるのにどうなったのかまったく分からないというのだった。けれどもこれについては、徳川閣下からは何の返事もこなかった。

ジャワから強制労働に連れてこられた労務者で足に潰瘍が出来てサランブーン街の通りに横たわっていた男があった。彼はいまベチャの車夫で、ときどき診療所に訪ねてくる。ストモもそんな一人だった。ストモは潰瘍が直ったあとでは私の診療所の手伝いをして、何事もつとめてくれた。いまはインドネシアの税関で働いている。

ミナンカバウ社会から徳川閣下への贈物

1944年の初めころ、ブキティンギ国民銀行頭取のアンワル・スタン・サイディ氏が、ブキティンギの文化団体の一行を昭南島に連れてくることについて私に相談に来た。私は大賛成だった。実現すればシンガポールと昭南島にミナンカバウの文化が初めて紹介されることになる。私の役割は会場を探し、招待客リストを作り、公演の日時を決めることであった。招待客には先ず徳川閣下、それに秘書の石井氏、軍政監部宣伝班長の島貫氏とそこのスタッフ、昭南特別市の関係者、文化団体関係の人々などであった。

上演種目はタリ・ピリン（皿踊り）、シラット（護身術）、それに結婚式の実演などであった。その次に贈物贈呈ダンスがあった。私はびっくりした。何も聞かされていなかったからである。これは徳川閣下に銀装のルマ・ガダン（大きな家の意で、そこは首長たちと宗教上の指導者たちが集まって、伝統、宗教、習慣などについて話し合う場で、いわばミナンカバウ民主主義のシンボルである）の模型とこれも銀製の米倉（繁栄のしるし）を贈る儀式であった。贈物は銅のお盆にのせられ、シリ（かんで味わう葉）、ヤライム・チョーチク、ピナンの種子（びんろう樹）、黒煙草など真鋳の壺に入ったものなどとともに、ミナンカバウの民族衣装を着た2人の少女に捧げ持たれ、徳川閣下の席にあと5メートルほどのところまでしずしずと進んだ時、閣下は突然隣席の石井氏をかえりみて何かささやかれた。石井氏は私に小声でたずねた。「どうすればいいんですか。」「ちょっとシリに手をふれてください」私も小声で答えた。少女たちが閣下に贈物を差し出した時、閣下は立ち上がって、シリに手を触れられた。銀のルマ・ガダンと米倉を閣下は受け取られた。閣下も石井氏も大喜びで、場内からは一斉に拍手が沸き起こった。2人はアンワル・スタン・サイジ氏とミナンカバウ文化に礼を言われた。これはまことに印象的な場面でミナンカバウにとっての大きな光栄のときであった。

徳川閣下が秘書の石井氏を帯同、ミナンカバウ訪問を考えていられることを耳にした私は、早速アンワル・スタン・サイディ氏にそのことを知らせた。閣下には知らせずに盛大な歓迎会を開いてほしかったのである。私は昭南島から船でパカンバルに行き、そこからブキ

ティンギまで車を走らせた。そして徳川閣下の到着後2日目に突然閣下のホテルにご挨拶に伺い閣下を驚かせた。友人のアンワルから私は、閣下を歓迎するために宿舎のホテル・セントラルまで学童たちがずっと道の両側に並ぶと聞いてうれしかった。閣下も石井氏もそんなことは予想されていないにちがいない。翌日、私はアンワル氏の車で閣下と石井氏をブキティンギから10キロほどのスンガイ・プアルという小さな村に案内した。そこは家々が代々、家内工業として銅細工をしているので有名な村である。閣下は非常に興味をもたれた様子だった。スンガイ・プアルからバトゥ・サンカルに行った。ここはブキティンギからは60キロほどの地点で、かつてミナンカバウ王朝の都であった町である。閣下は歴代首長たちの墓に詣でられた。大きな樹々の木陰に煉瓦の塀をめぐらせた墓地から、古い時代の衣類、家具、武器などを納めてある古い木造の記念館に行った。徳川閣下は熱心にこれらの展示品を見て廻られた。もしかしたら日本の古い時代のものとの間に相似点があったのかもしれない。私たちは昼食もとらずに3時頃バトゥ・サンカルを発ち、別の道を通ってバソを通り、午後5時頃ブキティンギに着いた。土地の有力者たちとの会合予定時間に30分も遅れて、一同疲れてしまっていた。

徳川閣下は待ち受けた人々にお礼を言うとともに、到着時間が遅れたお詫びを言われた。閣下はさらに、ミナンカバウ訪問は初めてなことと、人々がよく軍政に協力してくれて嬉しいとも述べられた。「戦争は皆さんの日常生活にいろいろ不便、不都合を生じさせていますが、それは避けられないことなのでどうか我慢して下さい」と言われ、さらに軍政をスムースに運ぶためには、人々が日本語を習うことがきわめて重要であると強調された。そしてオランダの植民地からインドネシアを解放した大東亜戦争の意義を理解してほしいとも強調した。私は閣下の短いスピーチを一区切りごとに通訳した。

来客たちの代表としてエンク・スジャヘイ氏が挨拶に立ち、閣下を迎えることはミナンカバウにとってこの上もない光栄であると述べた。

日常生活上の不便、不都合は完全に理解された。大東亜戦争はまだ続行中であった。彼は前線の勇敢なる兵士たちを讃え、大東亜戦争は植民地支配に対する解放戦争であると述べた。「われわれは兄弟です。日本は兄で、われわれは弟です。われわれは最後の勝利の日まで協力することを誓います」とエンク・スジャヘイ氏は答えた。私はこの挨拶も通訳した。その場の雰囲気はなごやかで打ち解けたものであった。その集会は約7時間半続き、主な出席者はインドラトシャジャ氏（技師）、ナスルン氏（法律家）、アンワル・スタン・サイディ氏、カティ・スレイマン氏、ダトゥック・マジョ・ウラン氏その他の地元の名士であった。

翌日私たちはパダンへ向かい、直ちに市長官邸に矢野和夫市長を訪問した。官邸構内では、徳川閣下と石井氏を歓迎するための800人ほどの群衆が待ち受けていた。閣下と石井氏は到着するとすぐ官邸に入り、私はそとに残って群衆の中に入っていった。そこで私はこの土地で手広く商売を営み社会的にも名士として知られるスタン・バンダロ・バサ氏にあった。また私の小学校時代の級友だったアドゥラ・アラー・アリフその他の旧友たち、それに

中学時代の友人ジャミン、ススカ・ムルカンその他とも旧交をあたためた。

群衆は徳川閣下と矢野市長の挨拶を期待していた。演台もしつらえられマイクも整えてあった。私は通訳する心づもりをした。しかし何時間も炎天下で待っているのにスピーチの気配はまったくなかった。それどころか、待ちくたびれた群衆がすっかり驚きがっかりしたことに、閣下と石井氏は官邸を出るや否やすぐに待たせてある車の方に歩み去ってしまったのである。群衆は失望のうちに散って行った。私は閣下をひきとめる気力もなかった。私たちはブキティンギに帰りついたのは午後で、その晩、閣下と石井氏はミナンカバウ文化の夕の催しに出席したのであった。群衆の失望はマレーではハンパ・ハティとよぶものだった。ハンパは期待していいたのに何もないこと、ハティは心である。

徳川閣下と石井氏はその翌日昭南島に向けて去った。しかし私はそれから4日間ここに残って母や親類や友人たちと懐かしい時をともにすごした。私が故郷を出たのは1932年であるから、実に12年ぶりの帰郷であった。昭南島に帰りつくと私は閣下を訪れ、ミナンカバウの印象を伺った。閣下は「おもしろかった」と答えた。私は閣下のミナンカバウ訪問を非常に光栄に思った。閣下はその後もスマトラの話が出るたびに、この旅行のことを口にされていた。

スカルノ、ハッタ両指導者に会う

私は義勇軍のカリム大尉から、スカルノ、ハッタ両指導者がまもなくサイゴンからの帰途、昭南島にたち寄ると聞かされた。シー・ビュー・ホテルに一泊の予定である。1945年の8月のことだった。

朝8時半、私はラジャ・アリフ氏とともにそのホテルに着いた。最初に会ったのはハッタ博士であった。私たちが旅行はいかがでしたかと聞くと、すべてうまくいった、とだけで詳しい答えはなかった。私たちは、昭南でインドネシア人たちは軍政府と協力して活動している旨を告げ、それと同時に文化活動を通じて統一と民族意識の高揚につとめていると述べた。宣伝とか、娯楽のためとか、社交的催しのために文化的な演芸が必要となると、それをするのはいつも私たちの側であった。それは私たちの戦術だった。別に組織としては何もなかった。ハッタ博士は私たちの立場を理解してくれた。彼はインドネシア人の就業状態についても尋ねた。「港で働く労働者がほとんどで、そのほか市庁舎や海軍基地、郵便局などで働く者もあり、警察に勤めている者もあります。政府関係以外では小売店とか、小さな食堂の経営者もいます」と私は説明した。政治活動については、私たちインドネシア人は少数集団だと言うことを述べるにとどまった。したがって力は弱い。ハッタ博士は「中国人は多数を占め、経済的に十分力をもっている」とい言った。アミル博士も加わって、私たちの談話は45分ほども続いただろうか。ハッタ博士は私たちに、「興亜」という煙草を2箱くれた。

ハッタ博士と意見交換のすぐ後で私たちはスカルノ氏に会った。自己紹介が終わるとすぐスカルノ氏は、「どんな状態ですか」「準備は進んでいますか」と質問した。私は彼の質問の

意味がよくつかめなかったので、謙遜しながら、文化活動を通じてインドネシア人の統一をはかっていることを、そして同時に軍政府に協力しながらやっていることを話すと、スカルノ氏はきっぱりと、インドネシアにおいては人々が強力に結束している、用意もすべて出来ていると言った。「国内治安はがっしりしている。力を掌握すれば、平和と治安が保証される。外からの援助は不要だ。行政機関もしっかりしている。大きな変化は必要ない。われわれは自分で自国を運営して行けるのだ。最初の段階では財政的困難に直面するかもしれない。だがわが国は豊かである。もちろん小さな障害はいくつかあるが、それらは克服できるのだ。わが国がわれわれの手に移されるのはそう遠い将来のことではない。そのうちにラジオで大ニュースを聞くだろうよ。気をつけていてくれたまえ」と想いをこめていった。スカルノ、ハッタ両氏をタイピンに出発させるための自動車が待っていた。私たちはこの2人の大指導者に別れを告げた。この立ったままの会見は約20分ほどのものだった。まことに1945年8月17日、このスカルノ、ハッタ両指導者によって、インドネシアは独立を宣言したのであった。

結婚生活、1943年

私の毎日はきわめて忙しかった。緊張の連続と、責任と、果たすべき義務と、その上私は誰も彼をも喜ばせなければならなかった。人々は私が日本に留学したことを知っており、それで私の所へ直接、間接の協力や援助を求めにやってくるのだった。夜遅くまで会合に出席しなければならないこともしばしばだったし、そんな翌朝でも診療所を休むわけにはいかなかった。私は睡眠不足になり、朝食や昼食を抜くことも多かった。あまりの忙しさに私は神経がまいり肉体的にも弱ってきた。そんなときでも私を癒すのは私しかいなかった。

そのような状況のもとで私が生涯の伴侶に会ったということは、まことにアッラーのお恵みでありご意思であった。このおごそかな誓いを破れるものはこの地上にはどこにもいない。

1943年の初め、私はボルネオ［カリマンタン］のテロク・バユール出身のマスナ・ビンティ・モハマド・ディンという娘と知り合った。女たちはよく遠くの男女が結ばれることを、次のような諺で言う。「地上のライムと、海の魚、お鍋の中で一緒になる。」 その時代はまことに困難な時代で全てが不足がちであり不便であったが、二人になった私たちは、つらいことも微笑みを浮べながら乗り越えることが出来た。妻は家事を片付け、2人の子供、アムナとマスニアの世話をしたばかりでなく、長い月日にわたって、戦争が終わった後も、私の診療所の助手を務めてくれた。もちろん生活はすべてがバラ色のものではなく、私たちは終始警戒していなければならなかった。妻は私が監視下におかれていることを承知しており、万難を排して私の安全をはかってくれた。まことにマレーでいう、「生死を共に」であった。1943年後半のある日、午前10時ころのことであった。突然、ノースブリッジにある私の診療所の前に黄色い旗を立てた自動車がとまり、降りてきた人をみて私はびっくりした。慈恵会医科大学時代の友人髙木医師であった。車の後部席には将官が一人座っていた。軍服

をきた髙木氏は、にこにこと挨拶し、2人はたちまち同級生の昔にかえった。彼は私が診療に携わっていることを喜び、私はまた旧友が国家のため、東南アジアのために、聖なる任務を果たしていることを誇らしく思った。だが私は、彼が軍人になって前線へくるなど思いもかけなかった。

私たちは夢中で15分ほども話していたろうか。彼はせかせかしていた。その当時、日本軍の軍人が現地の民間人を訪問することは許されていなかったのだろう。また来る、と彼は言って去ったが、もう通りには見物人が立って黄色い旗を立てた車と私の診療所とを、不思議そうに眺めていた。見物人たちがどういうふうに思ったかは知らないが、この話は口から口へと瞬く間に広まった。

私はミドル・ロード141番地へ引っ越した後にも、髙木氏はしばしば訪れては何か医薬品で不足しているものはないか、と聞いてくれた。医薬品がひどく不足しているのを知ってのことだった。そして副官の渡辺氏を通じて3×5ビタミンB、2×5ビタカンファー、1×10モルヒネなどを手配してくれた。これらは医者にとっては宝物であり、私はどうしても必要のときだけ使うことにしていた。

髙木氏はやがてサイゴンに転任となったが、その時まで彼は、手に入るかぎりの薬品、器具、装置などを私のために供給してくれた。私はそういう賜物を受けるのに、どうして心が重く感じるのか分からなかった。与えてくれるのは級友であったが、それでも私はおそろしかったのだ。私は心から感謝した（後年、私は1975年に同窓会に出席するために日本を訪れたとき、群馬県桐生市の髙木家で2晩泊めていただいたことを忘れられない）。

ある日の夢

あるよく晴れた朝の9時頃、私はひとりコンノート橋の上に立っていた。通行人は1人もなく、車の往来もなかった。港にも船の姿は見られず、昭南特別市は時計塔も軍政監部周辺も静まり返っていた。時計塔の上空に、300メートルの高さに、2つの凧が争っていた。1つの凧は日本の旗でつくられ、もう1つはアメリカの旗でつくられていた。凧糸が互いに触れ合うにつれ、2つの凧は右へ左へとゆれ動いていた。5回目に日本の凧のナイロン製の糸が切れ、日本の凧は地上に落ちてきた。2つに割れた凧は上部がアンダーソン橋に、下部はラッフルス像の近くに落ちた。そして長い尾は20メートルほどがコンノート・ドライブに落ちた。私の立っている場所からは約200メートルの距離だったので、私はもっとよく見ようと近づいて行った。凧は道いっぱいの大きさだった。縦40メートル、横30メートル、尾は50メートルもあったろうか。巨大な凧であった。

この奇妙な光景を見た後で私はラッフルズ像の所まで行って、日本人が30人ばかり、2列になって、昭南特別市のセント・アンドリュー街からビクトリア記念館に入って行くのを眺めた。彼らはみな同じ背の高さ、同じ体格で、裾の方がしまった白い背広を着ていた。私が誰か知っている人はいないかと目で追っていると、驚いたことに鳥居御嶽氏がいたので、

思わず大きな声で「鳥居先生！　鳥居先生」と呼んだ。鳥居氏はにっこりして私を振り返った。彼が私を分かってくれたので、私は数人で一歩前に足を踏み出したとたん目が覚めた。それは1945年の上四半期のある朝、4時頃であった。この夢は日本が降伏するであろうと語っていた。しかし私はそれを信じることが出来なかった。私は自分自身と家族の安全のために、この夢の話は誰にもせず、口をつぐんでいた。私は軍政監部宣伝部長の小林大〔中〕佐の言葉が頭にこびりついていた。「日本語には“降伏”という言葉はない。スマトラ島が沈むことのないように、日本の軍艦は不沈である。」

私の生涯で、未来を予見し、数ヵ月後に真実となった夢をみたのはこれが2度目であった。その事実は説明の及ぶところではない。

1945年7月の初旬、日本は戦争に負け連合国に降伏するであろうという噂が広がった。人々は憲兵隊を恐れながら、口から口へとこの噂を広げていた。月の終わり頃には、この噂はますます拡がり、前の主人のイギリス人が帰ってくるのではないかという期待も持たれた。それは古い信念の再現であった。すなわち、シンガポールはたやすくは征服されない要塞で、英国の力に打ち勝つものはない、というもので、その半面には、シンガポールに悲惨と恐怖と惨酷とをもたらした日本の支配に対する呪詛もあった。

昭南特別市を囲む街路―ハイ通、コールアン通、セント・アンドリュー街、ヒル通など―やアンダーソン橋、フラートン街などを通る日本人の数は、軍人も民間人もともに次第に少なくなっていった。この変化は顕著なものであったが、騒動や暴動はまったくおきなかった。各民族集団の争いは、復讐の念を抱いているもの、静観するもの、われ関せずの態度をとるもの、あるいは一部のインド人のようにあからさまに失望を表明するものなどいろいろであった。

こういう噂が広がるにつれて恐怖に襲われたのは、日本人に協力した者たちであった。彼らはもうすでにマークされていた。彼らは皆各自で、あるいは相談しあって、英軍に捕まえられたら何というかと頭をしぼっていた。「もし捕まえられ尋問されたら、日本軍に強制された、と言おう、もし拒否しようものなら首が飛ぶ。おれは腹がペコペコだから働いたので、戦争協力じゃない。食べるものがなければ子供たちはどうなる。だから日本人に命令されたことをやったにすぎない。日本人は主人だったから、従っただけだ。英国人は何もしないで逃げてしまった。それで否応なしに日本人に働かされることになった。」

コーランの一節にもある。「誰が国を支配しようと、その政府に対して忠実であれ」と。警察、軍隊、公共機関その他に勤務していたマレー人にとって、これはまことに辛い行動規範であった。かれらは最終的に生き延びる道を選び、ひたすらコーランを唱えて過ごしたが、大多数の者は、「これは神の与えたもう罰だ」と観念して、それに安住したのである。私自身はといえば、私の場合は100万人の人口の中でほとんど唯一のケースであり、シンガポール―昭南島―のみならず東南アジア全体でも私のような体験者は他にいなかった。私には誰も相談する相手さえなかった。屈辱、脅迫、対決、精神的肉体的拷問など、それはあの

ロビンソン街6番の牢獄で味わったものであった。15年の間に私が経験した生活のクライマックスは、1945年から46年にかけて訪れた。そして私はそれを忍耐と勇気をもって冷静に受け止めたのである。

もしかしたら、私はそんな星の下に生まれたのかも知れない。何事もアッラーの神の思召しのままである。私は自分の受けた辛い苦しみにみちた生活を、遅かれ早かれ祖国の上に輝く栄光の為の報酬であると考えた。ミナンカバウの老人たちはよく「夜も昼も自分の身体を洗う水のように」といったが、私も自分の運命を甘受するつもりであった。反逆罪で銃殺か、終身禁固刑か、政治犯として裁かれるのか、はたまた追放か、それとも通敵行為の罪に問われるか、それともマハトマ・ガンジーのようにアフリカに追放されるか、私はそのいずれでもかまわなかった。私の良心はまったく潔白であり、それはアッラーの神もご承知だ。私はアッラーに対してのみ、身をまかせてひれ伏す。私は1歳半の娘アムナと5ヵ月たったばかりのマスニア、そして妻のマスナを、私の身に何か起こった場合にはどうかお守り下さいと心をこめてアッラーの神に祈りを捧げた。